

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0193200094		
法人名	医療法人社団 三愛会		
事業所名	グループホーム「里の家」2号館 いぶきユニット		
所在地	名寄市大通北5丁目4番地		
自己評価作成日	平成30年8月20日	評価結果市町村受理日	平成30年11月30日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL	http://www.kajigokensaku.mhlw.go.jp/01/index.php?action_kouhyou_detail_2017_022_kani=true&JigvosvoCd=0193200094-00&PrefCd=01&VersionCd=022
-------------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ
所在地	札幌市北区麻布町5丁目2-35コーポラスひかり106号
訪問調査日	平成30年9月26日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は近くにコンビニや公園があり買い物や散歩など日常的に出かけ地域資源を活用させていただいています。地域の方々も温かく、町内会を通して様々な交流の機会があり地域に根差しつつあると実感しています。日中はレクリエーションや作業療法、体操、個々に合わせたリハビリ運動などで予防に努めています。入居者同士の会話もあり、テレビを観たりゆったりする時間を過ごしたりもしています。ユニットによって雰囲気が少々違うが、入所されている方々の個性や取り組みの内容の違いなどが反映されていると思います。入居者・家族とのコミュニケーションを大切に、気兼ねなく来訪されていると感じています。入居者にとって「安心」できる場所であって「ここはいい所だ」と思ってもらえるグループホームを目指しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、幹線道路に面した閑静な住宅街に立地し、近くにはコンビニ、散歩に行く公園や中学、高校、短期大学、大学など教育機関が点在し、消防署までは数分程の近さであり恵まれた環境である。母体法人が運営する病院が近くにあり、医療連携により利用者、家族の安心に繋がっている。木造平屋建ての中央に玄関を配置した左右対称のユニットは、明るくゆったりとした居間と食堂、娯楽談話スペースがあり、季節に合わせて利用者と一緒に作った折り紙の作品などが飾られ、家庭的な雰囲気の中で、利用者が安心して自由に生活できるよう支援している。地域住民とは日常の交流のほかディサービスで利用者との交流、住民や大学寮生などが避難訓練へ参加し、住民の芋畑の提供があったり、焼肉収穫祭で住民を招待するなど地域との交流を継続している。運営推進会議では利用者が発表や近況報告を行っている。5年以上の経験を持つベテラン職員が半数を超え、利用者や家族からも信頼が厚く、家族来訪時には利用者の近況・様子を積極的に知らせ、意見や要望を聞いて運営に反映させている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果		項目	取り組みの成果	
	○	↓該当するものに○印		○	↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念をユニットに掲示し理念の中でも「安心」につながるようケアプランを通し実践に努めてきた。	「安心して、自由に生活できる家」、「生きがいをもって、地域の中で楽しく生活できる家」、「心豊かに、自分らしく生活できる家」を事業所理念とし、玄関、廊下、事務室に掲示している。理念は採用時研修のほか職員はカードとして携行し、全体会議で唱和することで意識付けをして日々のケアに反映させている。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所は町内会に加入し、事業所の催しに招くこともして年々交流の機会は増えている。	町内会に加入し地域の一員として、近隣住民と散歩での挨拶や会話、利用者は夏祭りへの参加、子供神輿、収穫祭には町内住民を招待するなど交流を継続している。看護学生の実習や大学生のボランティアを受け入れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の場を活用したり、看護学生実習を受け入れたりと当事業所のできる範囲で発信している。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一度開催し本人・家族も出席してもらい意見交換の場として活用しサービス向上に努めている。	利用者、家族、町内会役員、民生委員、地域包括支援センター職員などが出席して年6回開催している。運営状況の報告、行事予定、事故報告、利用者や家族との意見交換、行政職員からの情報提供などを行って、意見をサービス向上に活かしている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者とは相談しやすい雰囲気と環境があり、直接出向き相談することもある。また、事業所運営やサービスに係る疑問等についてもすぐに対応と回答をいただいている。	高齢者福祉課、介護福祉課などの担当者とは密に連絡を取り、電話や窓口を訪れ情報や助言を得ている。地域包括支援センター職員からは公共施設の情報や、案内がありケアに反映している。市主催の研修会に出席して研修報告を職員間で共有している。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を3か月に一度開催し、身体拘束に繋がらないためのケアや係わり方などを確認している。	内部研修と3か月毎に身体拘束廃止委員会を開催し、職員は身体拘束の弊害を理解して、拘束をしないケアに努めている。利用者の動向把握は職員の見守りとドア開閉時のチャイムと扉のセンサーを使用している。行動抑制の言葉は使わないようにし、不適切な言葉には都度注意している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と関連し検討と確認をしている。		

グループホーム「里の家」2号館 いぶきユニット

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全体で学ぶ機会はなかなか持てていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の相談時には当事業所について説明し、入居の契約時にも十分な説明をし同意をいただいている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	3か月に一度ケアプランを通し家族からの要望などを伺う機会を持つようにしている。	利用者からは日常の会話や生活の中で、家族等からは来訪時などに意見や要望を聴くよう努めている。家族には「いぶき通信」と共に利用者の最近の様子を知らせている。また、家族との面会時やケアプラン作成時には利用者の様子を伝え、意見や要望を聞いて運営に反映させている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、ユニット単位で毎月行う話し合いの場に参加し、職員の意見を聞く機会を持ち日常の運営に反映できるよう努めている。	管理者は職員が何でも話すことができる環境を整え、行事やイベントなどで気づきやアイデアがあれば会議の議題にしている。又、人事考課を実施し、個人目標を基に面接して意見や提案を聞いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は年に一度、人事考課により個々の勤務状況や実績を把握して、個人目標を基に面接をして向上できるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修の機会を持ち外部研修でも経験年数を照らし合わせ受講する機会を持っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者同士で相互訪問する機会はないが、地域の研修会などで情報交換する機会はある。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に家族や担当ケアマネージャーから情報を収集し、その時の「困っていること」に耳を傾けるよう心掛け少しでも「安心」につながるような係わりを持っている。		

グループホーム「里の家」2号館 いぶきユニット

自己評価	外部評価	項目	自己評価		外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人・家族とはコミュニケーションに心がけ少しでも安心できるよう関係づくりに努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	情報の中でまず必要な支援は優先できるよう柔軟な対応に心がけている。			
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	出来ることを引き出し活動を共に行っていく中で徐々に関係は築けてきている。			
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	その時の状況や場合によっては家族にも相談や協力をお願いし本人を支える支援をしている。			
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出の機会は少ないが、希望があれば家族との外出は自由に行っている。また、家族以外の友人や知人の来訪もあり関係が途切れないようにしている。	日々の会話や家族の情報などから利用者の生活歴を把握し、馴染みの人や場所を把握するよう努めている。友人や知人が来訪の折にはゆっくり会話をできるように配慮している。床屋、図書館、公園やコンビニでの買い物などには職員が同行し馴染みの関係が途切れないよう支援に努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中は居間で過ごす時間が多く、座る場所もほぼ決まっており、隣に座るのは馴染みの人となっている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居した後の支援は行っていないが、相談があれば対応していきたい。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意向に沿える様カンファレンスなどで検討している。	日々の会話、家族の情報から思いをくみ取るように努め、新たな気づきは家族に確認している。意思疎通が困難な時は動作、表情、仕草などから推測し、日々のミーティングで共有して希望や意向に添うよう支援している。		

グループホーム「里の家」2号館 いぶきユニット

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に本人・家族からの情報収集を基に把握するように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日中は居間で集まっている時間が多いため、みんなと一緒に活動が多い。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	話し合いの場には本人・家族は参加しておらず家族にケアプランを説明する際に意見や要望を伺うようにしているが「お任せします」という意見が多い。	介護記録、担当職員の意見、利用者や家族の意向を反映させ、短期3ヶ月、長期6ヶ月で介護計画を作成し利用者、家族に説明し同意を得ている。状況に変化があればその都度見直すこととしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や実践を記録し、申し送りなどで情報を共有しながらモニタリング、プラン作成につなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々のニーズに応じ受診やリハビリ通院の支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	日々、散歩や近くの美容院の利用などの支援をしている。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族が希望する医療機関や医師への受診を支援している。	本人、家族の希望に添ったかかりつけ医に受診できるよう支援している。受診時は職員が同行し変化があれば家族に報告している。法人運営の病院と連携して看護師が週1回来訪し、利用者の健康管理を行っている。歯科医は協力医を利用する事で家族から同意を得ている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	法人運営の病院と連携し、医療連携で週1回看護師訪問があり、1週間ごとに体調について記載した用紙で報告し、看護師からも意見やアドバイスをもらっている。		

グループホーム「里の家」2号館 いぶきユニット

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合、病院から情報をもらうようにし関係づくりに努めている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早い段階で家族と話し合い、グループホームでできることを共有し出来る限りの支援をしている。	契約時に重要事項説明書に記載の「重度化した場合における対応に係る指針」に基づき、利用者と家族に説明し同意を得ている。状況に変化があるときは主治医の判断に基づき利用者、家族と協議し、希望に添えるよう支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今後、消防の協力を得ながら救命講習を受けることを検討。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回は消防と地域の方々には協力をいただき避難訓練をしている。災害時に備えマニュアルを作成し、飲料水、食料、ストーブを備蓄している。	年2回昼夜を想定した避難訓練を行っている。訓練では消防職員が立ち合い、近隣住民や近くの大学寮の学生、運営推進会議メンバーなどが参加して誘導や見守りを実施している。石油ストーブ、カセットコンロ、照明、飲料水、食料など3日分を備蓄している。	9月6日に胆振東部地震による全道ブラックアウトという想定外の事象が発生し、オール電化の事業所として運営に支障が起きた。この事象が冬季だった場合を想定し、自家発電装置の設置や代替の暖房などを災害用資材として用意することについて、母体法人と対応策を協議し取り組んで行く事を期待する。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入浴介助などでは利用者によっては女性職員が対応することもあり、出来る限りの配慮はしている。	接遇の勉強会や外部研修会に参加して、大きな声やあからさまな言葉は使わず目立たなく尊厳を傷つけないケアを実践している。なれなれしい言葉使いは特に注意をしている。入浴や排泄の介助は本人の要望に沿うように配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	認知症が重度な方やコミュニケーションが難しい方については、職員の都合で決めてしまうこともあるが、基本的には本人が選択できるよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の都合で待ってもらうことなど、その時の状況では希望に沿えない場合もあるが、基本的には本人の言動を尊重しながら係わっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員側で判断して美容院などへ行くことが多いが、本人希望で美容院へ行ったりお化粧をする方もいる。		

グループホーム「里の家」2号館 いびきユニット

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員が献立を考え嗜好なども考慮している。調理の作業を一緒に行うことは少ないが、後片付けは一緒に行うことが多い。	利用者の体調、能力に応じて下膳、食器洗い、テーブル拭きなど自発に行っている。食材は2日に1度旬の物など購入している。誕生食には好みのもを提供し、季節の行事食はバイキング形式をとっており好評である。7月～8月の間で駐車場で焼肉を行い、家族や住民を招待しながら利用者と共楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	たくさん食べられない方や嗜好が献立に合わない方に関しては、本人が食べられる量を考慮した盛り付けにし、食べられない食材があった場合は代替りの食材に変えるなどの工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	就寝前の口腔ケアを職員側で支援している。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	訴えの無い方は時間を見てトイレへ誘導し、失敗の回数を減らせるよう支援している。現在オムツを使用している方はいない。	排泄チェック表を使用し排泄パターンを把握して、合図やサインを見逃さない様に努め目立たない声掛け、時間誘導を実践し自立排泄へ支援をしている。状況に応じてパッド、紙パンツ、布パンツなど使い分けているが、大半の利用者は自立排泄ができ、現在おむつを利用している人はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食材や運動だけで便秘解消することは難しいので便秘をしてしまった場合は、下剤を処方してもらい定期的に排便があるよう支援している。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	自ら入浴を希望される方は少なく、間隔をみて職員側から勧め週2回は入浴できるようにしている。	週2回以上を基本とし時間、入浴回数は本人の要望を取り入れ、同性介助を基本としているが本人の意向に沿うように配慮している。湯舟は大きく2人介助に便利である。入浴剤の使用や会話する事で入浴を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼寝をする方は少ないが、状況によって自ら日中でも横になって休息する方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の内容は個人ファイルに管理していて、職員がいつでも確認できるようにしている。処方が変わった時も申し送りをしている。		

グループホーム「里の家」2号館 いぶきユニット

自己評価	外部評価	項目	自己評価		外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	女性が多いため家事作業が好まれる方が多く、出来る範囲で日々一緒に行っている。			
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の希望に沿いながらの外出は難しい面もあるが、「帰る」と一日何度も言われる方に対しては一緒に外に出たり、また、家族と共に外出することには支援している。	1年を通して朝の散歩を日課として楽しんでいる。近隣公園への散歩、図書館、コンビニでの買い物、道の駅、サンピラーパーク、ミニドライブや花見、紅葉狩り、外食などを楽しんでいる。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	普段、お金は本人には持ってもらっていないため自由に使える環境にはない。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を掛けたり手紙を書いたりすることはほとんどない。			
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	出来る限り夕方からはゆったり過ごせるよう心掛けている。混乱につながる環境にならないように努めている。	居間兼食堂は一体型で広く、吹き抜けに天窗(四方)があり一日中明るく開放感がある。テーブルやソファ、テレビなどはゆったりと過ごせるように配置し、利用者は思い思いに過ごしている。エアコンや加湿器などで生活環境を整え、刺激音を出さないよう配慮している。壁には行事の写真や利用者の紙細工作品などが飾られ、家庭的な雰囲気の中で、利用者は安心して生活している。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間で過ごす時間は自然と気の合う人同士が隣になるように座ったり、思い思いで過ごせていると思う。			
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものを持ち込んでいただくよう話をしている。趣味の小物や家族の写真など持ち込み、個々によって雰囲気が違う部屋が違っている。	カーテン、クローゼットが備え付けられており、利用者は整理タンスやテレビ、ベッド、椅子など使い慣れた生活用品を持ち込んで使いやすいように配置して生活を送っている。また、思い出の縫いぐるみや写真などを飾り、居心地よく過ごせるよう工夫している。ベッドの下まで掃除が行き届き清潔に配慮している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	迷うことがあるときもあるが、職員が付き添うことで大きな混乱はみられていない。			